口語詩句 10 月選と選評　　龍　秀美

　口語詩句という詩形でなくては表せないもの、特にこれまでの短詩形文学では、たとえ自由律でも無意識の縛りのうちに敬遠されてきたモチーフや感情の動きというものを探っています。いわゆる「文学的」でないもの、とでも言いましょうか。31 文字をはみ出し、35 文字以内で可能になること。定型意識から自由になることで見えてくる「みんな、誰でも」の文学。
　今月は選考の意識をそこら辺りに置いて、印象に残った数編を挙げてみます。

無駄を省いて
意味のないものに金を払う
　作者 サナル（東京都）
――はっきりと意識された生活スタイルの転換。不要不急か。

母を名前で呼ぶと
そんなにも喜ばしいのか。
　作者 来栖　優（宮城県）
――「母」という茫漠とした存在で呼ばれてきた個人を取り戻すこと。この時代に「改めて」というか「未だに」だったのだろうか。

この世では
あと何度 川を渡るだろう
　作者　 宇井 麻千（大阪府）
――彼岸と此岸の間を流れる川。こちら側の橋を一本わたる度に一歩近づいているのかも知れない。

ゴムが切れたパンツを
見せにくる父
獲ったとかげを
見せにくる猫
　作者 加藤 美紀（愛知県）
――「父」という存在の面白さ、奇妙さ。

僕の弱さを笑った奴を
僕の醜さでぶん殴る
そんな詩が書きたい

　作者 みたらし（京都府）
――「障碍者の文学」にも共通する強さ。弱さは欠点ではなく、醜さはパワーとなる。

夕焼けの糖度を浴びる曼殊沙華
　作者　 宇井 麻千（大阪府）
――夕方の光線は紫味を帯びた赤がひとしお際立ちます。それを「糖度」とした発見。異質の言葉を５・７・５がどこまで結び付けられるか。

ラインや電話だと
今伝わるから
ちょっと未来のあなたに宛てて
手紙を書きます
　作者 弐号（広島県）
――即時という感覚が一般的になってきた現在、手紙というメディアが持っている、時間をホールドする機能の発見。

重い女にならないよう
LINE を控えようと思う
その思いがもうすでに重い
　作者 雨傘うみ（愛知県）
――日本歌謡の伝統路線「待つ女」の LINE 版。

幸福とは
深爪した親父が
缶ビールを中々開けれず
なお　微笑むあれだ
　作者 山口　航平（佐賀県）
――身体全体が幸福な時がある。ビールを飲む前は何も考えていない。

**ノートに必ず下敷きを**

**敷いていた私は**

**恋愛に対して**

**臆病になってしまった**

**作者 君風 波音**（埼玉県）

――自分の痕跡を残すためらい、必ず痕を残す「恋愛」という現実。

**家父長制のように雨は降って**

**遠くの路地を濡らしている**

**作者 青木雅**（埼玉県）

――雨と家父長制は似合う。

言葉で伝えられるなら
言葉なんて要らない
　作者 佐々木佑輔（埼玉県）
――文学の「常識」をズバリと言ってのけた。

霧中を駆け抜けるための赤い靴
　作者 ベロニカ（神奈川県）
――「霧中」か、前の見えない危険な情熱か。赤い靴に導かれて。或いは赤い靴を道具として。

ならず者のペンだこを見て
わたしは歌がうまかったことを
思い出しました
　作者 ヒロミヤカザル（京都府）
――人間の中に潜んでいる思いがけない可能性の要素。これは定型では書きにくいかも。